

ちひろ美術館・東京  
美術館だより

No.172

2011.3.1



# —おめでとう30周年!—ちひろと黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』展

●2011年3月1日(火)~5月15日(日)

後援：絵本学会、こどもの本WAVE、(社)全国学校図書館協議会、日本児童図書出版協会、(社)日本図書館協会、杉並区教育委員会、中野区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区教育委員会 協力：講談社

## ちひろと黒柳徹子

1974年8月9日、黒柳徹子(当館館長)は、新聞にいわさきちひろの計報記事を見つけました。黒柳の誕生日であったその日、俳優の坂東玉三郎さんがプレゼントをくださるというので、お返しに用意していたのがちひろの絵本『あかちゃんのくるひ』(図1)でした。「広げた新聞に涙がポタポタ落ちました。一度もお逢いしたことの無い方の死亡記事を見て泣いたのは、初めてでした。この世界から、子どもの味方がいなくなってしまうような気持ちでした。」

## 『窓ぎわのトットちゃん』

『窓ぎわのトットちゃん』には、戦時中もユニークな教育を貫いたトモエ学園での小学校生活を中心に、黒柳の子ども時代がつづられています。この本を書くにあたり、黒柳は、子どもの幸せを願っていたちひろの絵をどうしても使いたかったと言います。初出の雑誌「若い女性」での2年におよぶ連載期間中、黒柳は、TV出演の合間をぬい、ちひろ美術館に毎月足を運び、ちひろの絵を自ら選びました(図2~4)。1981年に出版された単行本がベストセラーになると、多くの映画監督やテレビ局が映像化を申し出ました。しかし、読む人それぞれが心に抱くイメージを大切にしてほしいという黒柳の願いにより、一度も映像化はされていません。現在、国内の発行部数は760万部を超え、世界35カ国以上で翻訳出版さ

れています。この本が縁で、1984年にユニセフ親善大使に任命された黒柳は、最初の訪問国アフリカのタンザニアで「トット」とはスワヒリ語で「子ども」を意味すると知ったとき、不思議な運命の出会いを感じたと言います。

## 「君は本当はいい子なんだよ。」

学校の帰り道、塀の下をジグザクに這って、鉄条網にひっかかり、お洋服をビリビリにしてしまうトットちゃん、大好きな男の子をお相撲で投げ飛ばしてしまうトットちゃん、珍しいものを見つけると飛びこまずにはいられないトットちゃん……。『窓ぎわのトットちゃん』には、トットちゃんのユニークな個性を物語るエピソードが収められています。普通の小学校を1年生で“退学”になったトットちゃんをトモエ学園の小林宗作校長先生は、温かく迎え入れました。そして、毎日、トットちゃんにこう言いました。

「君は、本当は、いい子なんだよ。」トモエ学園にいるあいだじゅう、校長先生がかけてくれたこの言葉は、どこかに疎外感を持っていたトットちゃんに大きな安心と自信を与えました。「この言葉が、どんなに私の、これまでを支えてくれたか、計りしれません。この言葉がなかったら、今の私は、いません。」

## 「みんな一緒だよ。」

「君たちは、みんな一緒だよ。なにをやるのも一緒だよ。」これは、トモエ学園の小林校長先生が、いつも子どもたちに

語りかけていた言葉です。「助けてあげなさい」と言ったことは一度もありませんでした。トモエ学園では、ハンディキャップを持つ子どもも含めて、子どもたち、みんなが、互いを認め合い、自然に協力して学校生活を送ったと言います。

ちひろの絵には、小林先生と同じ温かなまなざしが感じられます(図5)。それは、子どもたちに共感し、どの子も本来持っている美質に目を向けるまなざしです。ちひろは、「私には、どんなにどろだらけの子どもでも、ボロをまとっている子どもでも、夢をもった美しい子どもに、みえてしまうのです。」\*と語っています。**トットちゃんと戦争—平和への願い**

『窓ぎわのトットちゃん』は、トモエ学園が東京大空襲で焼け落ち、トットちゃんが満員の疎開電車で東北に向かうところで終わります。黒柳は、子どもの頃に戦争を体験することで、改めてトモエ学園で経験したことの尊さを想い、大人になってからも子どもの頃に感じたことを大切にしています。一方、同じ戦争を娘時代に体験したちひろは、美しいものが周囲から消え失せ、罪のない子どもが犠牲になる様子を目の当たりにし、深い憤りを感じていました。トットちゃんとお友だちの天真爛漫な姿は、『窓ぎわのトットちゃん』のなかで、ちひろの絵と響き合います。そこには、ちひろと黒柳徹子の、子どもの幸せと平和への願いが込められています。(原島 恵)

※いわさきちひろ『子どものしあわせ』の表紙画を描いて「子どものしあわせ」草土文化 1963年3・4月合併号より

## ●展示室2

# ちひろ美術館コレクション 国際アンデルセン賞受賞画家展

●2011年3月1日(火)~5月15日(日)

後援：(社)日本国際児童図書評議会

ちひろ美術館コレクションから「国際アンデルセン賞画家賞\*」を受賞した画家10人の魅力あふれる作品を紹介します。

イジー・トゥルンカは、人形アニメーション映画で知られ、絵本でも活躍します。「真夏の夜の夢」(図1)は彼の同名映画をもとにイメージした版画で、シェイクスピア原作の妖精と人間との物語を幻想的な画面にとらえています。

ロシアの民俗芸術の研究者でもあったタチャーナ・マーヴリナの絵には、伝統的な玩具や民具が登場します。素朴で大胆な色使いと装飾的な画面は、農民絵画からの影響を感じさせます(図2)。

日本人初の受賞となった赤羽末吉は、授与式で「日本の古い伝統的な美術の美

しさに現代的な解釈を加えたものを、次の世代の子どもに伝えたい」と絵本にかける思いを語っています。滑稽味あふれる『こぶじいさま』(図3)の世界を、日本画の技法を用いて、素朴な墨の線と色のにじみでユーモラスに描きました。

クラウス・エンヅィカートの『4人の子ども、世界をまわる』(図4)は、ナンセンス絵本で知られるエドワード・リアの原作。ルーベを片手に羽根ペンで描く精巧な線画で、日常の室内が、子どもたちの空想の世界へと変化していく様を克明に表現しています。

アンソニー・ブラウンの『ウィリーはチャンピオン』は、弱虫のゴリラが主人公です。鮮やかな色彩で細部まで丹念に

描き込まれたその姿は、一見グロテスクななかにも、どこか愛嬌のある雰囲気を感じられます(図5)。

ロベルト・インノチェンティは『ピノキオの冒険』(図6)の場面を、光と影、画面の深い奥行き、緻密な描写によって、物語の舞台をドラマティックに演出しています。

他にセンダック、カーライ、パツォウスカー、ウンゲラーの作品を展示します。各国の伝統や文化を背景にした画家の個性をご覧ください。(山田実穂)

※「子どもの本を通しての国際理解」を理念に1963年、国際児童図書評議会(BBY)により創設された子どもの本の国際的な賞。小さなノーベル賞ともいわれ、長らく子どもの本に貢献してきたと認められる、現存する作家および画家の全業績に対して、作家賞は1966年から、画家賞は1966年から授与されています。\*1960年までは作品に対して授与



図1 赤い花を持つ少女  
『あかちゃんのくるひ』(至光社)より 1969年

「トットちゃんは、明日からは、自分も、あの机にすわって、「海のもの、山のもの」のお弁当を、校長先生に見てもらんだ、と思うと、もう、うれしさと、楽しみで、胸がいっぱいになり、さけびそうになった。」  
「お弁当」より



図4 見つめる子どもたち 1969年



図2 うす紫の帽子の少女 1970年代前半

「校長先生は拍手した。みんなも、した。すると、その子は、前よりももっと大きい声でいった。「それからさあー」みんなは拍手をやめ、もっと耳を澄ませて、ますます身をのりだした。」  
「それからさあー」より



図3 ピンクのセーターを着た少女 1970年



図5 のぼり棒 1971年

●本展では、10人の木工作家が、『窓ぎわのトットちゃん』の表紙絵の少女が座っている椅子を、それぞれにイメージしてつくった「トットちゃんの椅子」も展示します。

●展示室2



図1 イジー・トゥルンカ (チェコ・1968年)  
『真夏の夜の夢』より 1961年



図2 タチャーナ・マーヴリナ (ロシア・1976年)  
『回転木馬』より 1958年



図3 赤羽末吉 (日本・1980年) 『こぶじいさま』より 1963年



図4 クラウス・エンツィカート (ドイツ・1996年)  
『4人の子ども、世界をまわる』より 1990-92年



図5 アンソニー・ブラウン (イギリス・2000年)  
『ウィリーはチャンピオン』より 1996年



図6 ロベルト・インノチェンティ (イタリア・2008年)  
『ピノキオの冒険』より 1987年

※画家名あとの( )内は、国名・受賞年。



## 10月16日(土) 2000年代の日本の絵本展関連イベント シンポジウム「2000年代の日本の絵本を語る」

2000年代の日本の絵本展に合わせて開催したシンポジウム。パネリストは土井章史さん(トムズボックス代表)、広松健児さん(偕成社編集者)、竹迫祐子(安曇野ちひろ美術館副館長)。会場の方にもマイクを向け、活発に意見を交換しました。その一部をご紹介します。

**広:**2000年代の絵本について“日本化”というキーワードを考えてみました。今、僕たちが普通に“絵本”と思っている形を最初につくったのは福音館書店の月刊「こどものとも」でした。横書きの文章で一冊丸ごと創作絵本という形式も画期的でしたが、その内容は、欧米、特にアメリカの子どもの本を規範としたものでした。90年代になると、土井さんが編集した“イメージの森”シリーズをはじめ、作家性の強い作品が増えた。2000年代はその延長線上で、従来の絵本の規範をゆるがせるような作品が増えてきて、それを絵本の“日本化”ととらえています。

**竹:**“イメージの森”は実験的でした。荒井良二の『ユックリとジョジョニ』、和田誠の『ねこのシジミ』、スズキコージの『サルビルサ』もこのシリーズですね。

**土:**僕は絵から入った。お話は二の次で。ちょうどバブルがはじける時代、まだ出版社に余裕があって、受け入れてくれた。**広:**“イメージの森”を見て絵本画家になろうと思ったという長谷川義史さんたちが出てきたのが2000年代。かつては童話作家がテキストを書いて、絵本画家が絵を描くパターンが多かったけれど、2000年代には、物語を語らない形のテキストライターが活躍して、物語性を持つ

絵本が弱くなってきたとも感じます。

**土:**創作絵本のどんぴしゃの世代っていうのは幼稚園の年中・年長ぐらいです。だけど、どんぴしゃに合わないけれど、僕ら大人が読んだら、面白いという本、作家性の強い絵本が増えて、それが日本化につながっていると思います。

**竹:**欧米の場合は大人は子どものためにしか絵本は買わない。イギリスのセブンストーリーズという絵本原画も扱うミュージアムの方に、イギリスではティーンエイジャーや大人が絵本を読み続けることは考えられないと言われました。日本と土壌が違うのだと改めて認識しました。

**広:**70年代にすばる書房が出した雑誌「月刊絵本」は、作家たちの議論の場だった。後続の「MOE」、「Pooka」という雑誌は、自分のために絵本を買って若い人のための雑誌です。



2001年に、イギリスで開かれた日本の絵本の原画展のカタログで、イギリスの絵本評論家が日本の絵本を二つのグループに分けています。一つは物語が中心で、絵が物語の展開への期待を高めるタイプ。もう一つは、絵が物語に従属するのではなく、絵そのものを能動的に見るように読者を誘うイギリスでは見かけな

いタイプ。例えば『ねこのセーター』は分類すると物語の絵本に入るけれど、イギリスの人が考えている物語とは違う。日本の特徴としてそういう絵本があり、2000年代になって大きな力を持って、読者に受け入れられるようになった。

**土:**今、日本の絵本が本当に面白い。子どもが感情移入できないような斬新な絵本も商業出版として成り立っているのは、すごいこと。これを守っていきたい。

**広:**黎明期の「こどものとも」を見直すのは実りのあることだと思います。一方で、日本化はどうしても起こってしまう。そこには、野生的な感性や自然への感応力や、論理を軽々飛び越える想像力を持つ子どもの側へ近づきたいという作家の欲求があるのではないのでしょうか。

**竹:**日本の絵本特有のものが市民権を得つつあったのが90年代、そして2001年に9.11があり、03年にイラク戦争があり、絵本の世界でも価値観の問い直しがあった。1960~70年代初頭に、いわさきちひろは絵で能動的に読者に語る表現に取り組んだ一人です。非常に特殊な表現と思われていたのが、40年を経て、新しい世代のなかで表現されていると感じます。最後に一言ずつお願いします。

**広:**日本独自の絵本を世界の子どもたちにも楽しんでもらえる時代が来ることを楽しみにしています。1930~40年代の絵本が持っていた活力をもう一回取り戻す努力が必要なんだと思います。

**土:**一番面白いアートの結晶が絵本かもしれない。2010年代に入って、それが見えつつあると感じます。(原島 恵)

## 11月27日(土)、12月11日(土)、2011年1月15日(土) 連続講座「ちひろとちひろが愛した画家たち」

展覧会に関連し、3回の連続講座を開催しました。

2010年11月27日の「ちひろとちひろが愛した画家たち」では、山田実穂(展示担当学芸員)が、ちひろの人生を紹介しながら、9人の画家たち——岡本帰一、武井武雄、初山滋、岡田三郎郎、中谷泰、丸木位里、丸木俊、マリー・ローランサン、ケーテ・コルヴィッツ——それぞれの絵との出会いや影響についてお話ししました。12月11日は竹迫祐子(安曇野ちひろ美術館副館長)による「絵雑誌『コドモノクニ』の画家たちとちひろ」。1922年に創刊されたこの絵雑誌で、ちひろは幼いころに岡本や初山、武井等の絵を目にしました。幼い日に心に受けた感動が、心の糧になっている実感は、ちひろが子どもの本の仕事をする上での、大き

な励みであったに違いありません。

2011年1月15日は原爆の図丸木美術館学芸員の岡村幸宣氏を講師に招き「丸木位里、俊とちひろ」についてのお話をうかがいました。1946年5月に疎開先から上京したちひろは、池袋モンパルナスの桜が丘パルテノン(現・豊島区南長崎)にあった丸木夫妻のアトリエの早朝デッサン会に通うようになりました。プロを養成する会というよりも、「絵はだれでも描ける」という俊の持論のもと、さまざまな人が参加し、仲間どうし交代でモデルを務めながら人物デッサンに取り組んでいたといえます。当時の夫妻の作品を比較してみると、自分の人体デッサンに自信をもって力強く線をひく俊に対して、前衛日本画家として活躍していた位里は、墨を流して広がっていくにまか

せ、輪郭線を描かない絵を描いていました。ちひろは俊の影響を受けて力強いデッサンに励んでいましたが、後の水彩画をみると、位里の影響がより大きくみられます。ちひろが丸木夫妻のアトリエに通っていた当時は、まだ「原爆の図」は描かれておらず、俊は洋画家・子どもの本の画家として活躍していました。子どもの本への取り組みでは一方的な師弟関係ではなく、俊がちひろの影響を受けた部分もあったようだと言っています。「原爆の図 第六部 原子野」(1952年)のなかにも、まるでちひろが描いたような幼い子どもの姿が見られるということも示してくださいました。

ちひろの画風がどのように形作られていったのか——今後の研究課題も多く見えた今回の展覧会でした。(上島史子)

## ひとこと ふたこと みこと



**11月2日 (火)**  
子どものころ、毎月買ってもらっていた絵本の最初のページがちひろさんの作品でした。子どもながらにその絵にふっとひきこまれ、不思議な気持ちになったこと、今でも覚えています。アトリエのピアノ、偶然にも私が小さいころ弾いていたピアノに似ていて、なんだかまた不思議な気持ちになりました。(浩子)

**11月27日 (土)**  
私はトットちゃんの本を読んでから、いわさきちひろさんの絵が好きになりました。どんなところが好きかという、かわいい絵だからです。私もそんな絵をかきたいです！(奥田葵衣 11歳)

**〈ちひろとちひろが愛した画家たち展〉**  
**11月24日 (水)**

ちひろさんの繊細な絵、1本の線を形作る原点を垣間見ることができたように思いました。また、晩年“自分でできることから”と描いた、ベトナム戦争の絵本があることを知り、改めて自分でできることを探してみたい気持ちになりました。

**12月12日 (日)**  
ちひろさんの絵に込められた思いに今日触れられた気がします。いろいろな人との出会いが、やさしいあたたかな絵につながっていくのだなあ。自分も人との出会いを大切に、たくさん吸収していきたいと思いました。戦争の絵と一緒に見て、一生懸命子どもたちに伝えようとしている親御さんの姿も印象的でした。(さや 21歳)

**12月12日 (日)**  
丸木俊さんの『ひろしまのピカ』の

絵には心がふるえました。丸木美術館にも何度か行きましたが、ここ、ちひろ美術館で原画が見られるとは思ってもみなかったので感激しています。いつも戦争反対、世界平和を願います。(Fukui)

**2011年1月5日 (水)**  
企画展を毎回楽しみにしています。今回はちひろさんが愛した画家、初山滋、武井武雄、岡本帰一に興味をもち足を運びました。ちひろさんの作風は、ちひろさん1人で確立したものではないことをしみじみ感じ、いろいろな出会いがあったからこそ、たくさんのおすてきな絵が生まれたのだと実感しました。人って、良くなろうと、どんどん変わっていいのだということを教えていただきました。(多摩 みやざき)

## 美術館 日記



**10月14日 (木)** ☁/☀  
近隣の下石神井小学校から、3年生15名が総合学習「下石の案内人になろう」で来館。地元の施設を見学し、2年生に案内するのだそう。「入館者数」「展示は替わるのか」「今年の目標は?」「地域のためにしていることは?」などの鋭い質問が。さて、上手に案内できたかな?

**11月10日 (水)** ☀  
乳幼児を持つ母親が対象の講座(西東京市主催)にて、ちひろの人生や作品のほか、ちひろの子育てにまつわるエピソードや写真などを紹介。母として、悩みながら工夫を重ね、子育てと画業を両立させた姿に、受講者からは「思わず笑みがこぼれた」「作品中にわが子を見つけ、昔子どもだった自分を思い、体中が愛で満たされています」などの感想が。

**11月17日 (水)** ☁

夏の原水爆禁止世界大会で出会ったフランス人のWilliam LIS氏が来館。ちひろの平和へのメッセージに共感し、フランスにあるご自分の職場でもちひろの平和の絵セットを展示してくださっているとか。

**11月21日 (日)** ☀  
友の会交流会開催。戦後間もない頃、丸木位里・俊夫妻のアトリエで、ちひろとともにデッサンを学んでいた三輪寛子さんをゲストにお招きした。「絵の出来上がりは、どこで筆をおくかで決まる。ちひろさんは、筆を“止める”ことで、すばらしい空間を生み出している」など、同時代を生きた画家仲間ならではの会話に、一同が聞き入った。

**12月12日 (日)** ☀  
今年で4回目となる無料感謝デー。今日は過去最高となる1929名の来館者でにぎわった。「えほんのじか

んスペシャル」では、ちひろの誕生日(15日)にちなみ、誕生日がテーマの絵本を紹介。満員の会場は、親子と読み手が絵本を介して一体となり、心温まる静かな時間が流れた。

**12月14日 (火)** ☁  
「ちひろの愛した画家たち展」に出品の中谷泰氏のご子息、椽一郎氏が来館。中谷泰氏は、弟子のちひろと生涯交流を続け、当館設立時から亡くなるまでの13年間、初代理事長としても支えてくださった。椽一郎氏が、在りし日の父親との思い出をつづったブログ\*が公開中。

**2011年1月2日 (日)** ☀  
お正月2・3日限定で、WS「水彩のにじみ技法を使ってぼち袋をつくろう!」を開催。2時間かけて取り組む方や2回チャレンジされたご家族も。より多くの方に水彩技法の魅力をお伝えできたら、と願う。

\*「街中独歩」(<http://machinaka.cocolog-nifty.com/blog/cat40487952/index.html>)

## 窓

### 黒柳徹子さんと『トットちゃん』

松本由理子 (ちひろ美術館・東京 副館長)

黒柳さんとの出会いは、『窓ぎわのトットちゃん』から遡ること6年半前の1974年のことだ。ちひろの訃報に接した黒柳さんから、「ずっとちひろさんのファンでした。こんな悲しいことはありません」と記された手紙とともに花束が届いた。ちひろが好きで、白を基調に薄紫や薄桃色が少し混じった、清楚で可憐な花束だった。

これを機に、黒柳さんと遺族の交流が始まる。下石神井の自宅に招き、生前のままにしてあったちひろのアトリエも見せていただいた。息子の松本猛が、「いつの日か、ちひろの美術館を、絵本の美術館を作りたい」

と語ると、できることは何でも協力したいと、美術館作りに自ら参加してくださった。

美術館が開館2年目を迎えた頃だった。突然、黒柳さんが、こんな質問をしてきた。

「ちひろさんの絵って、たくさんあるの?」「女の子で小学一年生くらいのある?」「いろいろなポーズの子、いる?」「ランドセルしょって寄り道しているような子、ある?」

「ありますよ。もう、たくさん。いくらでも」と松本猛が答えたそのとき、黒柳さんは、「『窓ぎわのトットちゃん』を書くことを決めた」と後日、語っている。

書き下ろしは無理、月刊誌への連載で、

1979年から2年間、黒柳さんは、「徹子の部屋」と「ザ・ベストテン」というテレビのレギュラー番組を持ちつつ、毎月、ご自身で美術館に絵を選びに来られた。到着は真夜中。原稿が間に合わず、車の中から電話で粗筋を伝え、猛さんが候補作品を選んでいる間に、トットちゃんさんながら、未完成の原稿を、ゴシゴシ、消しゴムで消したり、書き直したり。文章に絵が添えられると、眼前に、生き生きとしたトモ工学園の子どもの姿が立ち上がった。

単行本に載らなかった作品も含め、今、東京・安曇野町館で展示中。ぜひご来館を。

●次回展示予定 2011年5月18日(水)～7月31日(日)

ちひろが描いた世界の童話  
—アンデルセンを中心に—

ちひろは「おやゆび姫」などのアンデルセン童話をはじめ、日本でもなじみ深い世界の童話を数多く描いています。紙芝居や童話集、絵本などに描かれた世界の童話の絵を展示し、ちひろのファンタジーの表現や画風の変遷を紹介します。



花のなかのおやゆび姫 1965年  
『おはなしアンデルセン』(童心社)より

<企画展>こどもの椅子展

出展作家：中村好文、宇田川隆、岡田泰、片岡清英・紀子、コバヤシユウジ、須藤崇文、田島燃、松山ちえみ、村西隆一、山形英三

10名の木工作家による子どもの椅子の数々を紹介します。見て、座って、触れて……親子で一緒にお楽しみください。



中村好文「ななつないす」 撮影：橋本裕貴

ちひろ美術館・東京イベント予定

<http://www.chihiro.jp/>

各イベントの予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。TEL.03-3995-0612 E-mail [chihiro@gol.com](mailto:chihiro@gol.com)

●新刊紹介

『ちひろ 春の画集』

○発売日：2011年3月1日

○体 裁：220×200ミリ、108ページ

○定 価：2000円(税込)

○ちひろ美術館・編、講談社・発行



既刊『ちひろ 花の画集』『ちひろ いのちの画集』  
『ちひろ 秋の画集』『ちひろ 冬の画集』  
続刊『ちひろ 夏の画集』(5月末刊行予定)

●ピエゾグラフによる

『ちひろ 春の画集』出版記念展

○会場：図書室

息吹あふれる春、新緑の風と光、愛らしい動物や子どもたち……。画集の出版を記念し、ちひろが描く、心はずむ春の世界をピエゾグラフで紹介します。

●紺野美沙子の朗読座 共同イベント

紺野美沙子によるおはなしの会

女優の紺野美沙子さんによる読み聞かせと子どもの本に関するトークイベントを開催します。

○日 時：5月28日(土)

○要申し込み 4月28日(木)より受付開始



※詳細は、ちひろ美術館・東京にお問い合わせください。

2011年1月より、松本猛氏(前・安曇野ちひろ美術館館長)がちひろ美術館常任顧問に就任しました。安曇野ちひろ美術館は、引き続き、副館長竹迫祐子が館長代行を兼任します。

●ピアノカ王子がやってくる!

大友剛が奏でる『窓ぎわのトットちゃん』

ピアノカとピアノ、そしてユニークなマジックで人気のピアノカ王子こと大友剛さんが、『窓ぎわのトットちゃん』の世界を奏でます。



撮影：菱川広昭

○日 時：3月21日(月・祝) 15:00～

○出 演：大友剛

○定 員：80名

○参加費：大人800円、子ども500円

(入館料別、高校生以下は入館料無料)

○要申し込み 2月21日(月)受付開始

大友剛プロフィール：ミュージシャン&マジシャン。自由の森学園卒業後、ネバタ州立大学で音楽と教育を学ぶ。帰国後、フリースクールの音楽講師としてひきこもりや登校拒否の若者と触れ合う。現在、音楽とマジックで各教育、福祉施設など国内外で活動。コンサート、ワークショップ、講習会のほか、0歳からのコンサートや絵本作家とのコラボレーションを展開。  
<http://otomotakeshi.com>

●わらべうたあそび

好評のわらべうたあそび。2011年も、継続して開催します。声を出して歌ったり、体を動かしたりしながら、親子で楽しく参加できます。0～2歳までの乳幼児と保護者対象。

○日 時：4月16日(土) 11:00～11:40

○会 場：図書室

○定 員：15組30名

○講 師：服部雅子

○参加費：無料(入館料のみ)

○要申し込み 3月16日(水)受付開始



●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日14:00より  
展示室にて、作品の解説や展示のみどころなどをお話します。

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日11:00より展示や季節にあわせて、絵本の読み聞かせなどをおこないます。(参加自由)\*授乳室もご利用になれます。

CONTENTS

<展示紹介>—おめでとう30周年!—ちひろと黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』展/

ちひろ美術館コレクション 国際アンデルセン賞受賞画家展……②③

<活動報告>シンポジウム「2000年代の日本の絵本を語る」/ちひろとちひろが愛した画家たち連続講座…④

ひとことふたことみこと/美術館日記/窓…⑤

美術館だより No.172 発行2011年3月1日

ちひろ美術館・東京